
納得できない従者

八島ちとせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

納得できない従者

【著者名】

八島ちとせ

【あらすじ】

境の従者・三島は、自分のことを何一つ語らない。それは、僕が
頼りないから?　だめな神主だから?　もんもんと悩む境は、思
切つて三島に聞いてみることにした

三島、あなたはずるい。

境さかいは、自分の従者である男に、何度もやいたかわからぬ。御櫛神社みくじんじゃの神主として、三島のよき主人として、常に振る舞つてきた。神主という職種上、任期中は年をとらないとはい、境はそれでも人並み以上に背丈が小さかつた。だから誰よりも大人びて見えるよう、常日頃から礼儀正しさを忘れないし、感情を表に出して公私混同することもない。仕事でのトラブルも、あくまで冷静に、私情をはさむことなく乗り越えてきた。あの雅でさえ自分を認めてくれたほどである、自分が神主として場違いなどではないと、誇りを持つて言える。

それなのに、三島ときたら、主人である境に何も相談しないのだ。仕事での相談じあんことはいつでも言つのに、三島本人の悩みや困難を、主人に打ち明けてくれない。三島を境の従者として任命してから、それなりの年月は経つのに、その中で一度も三島は自分に三島のこと話をしたことはなかつた。あまり、触れて欲しくないのだろう。境もまた、そのことをむやみに探つてはいけないことも分かつている。

しかし、せめて何か、例えば季節なら春がいいとか夏が嫌いとか、花は水仙がいいとか橘がいいとか、そういう好みの話くらいなら、共に話し合つたって問題ないだろ。三島はそういう話もしたことがない。一緒に、月を眺めながら酒を飲むことはあるのに、そこで月が綺麗だなあと月にかんする逸話をいろいろと教えてくれることはあるのに、その話の中に三島が関わるようなものは、ないのだ。

そこまでして、三島は自分を隠したい理由は、何？

「境か？」

嵐の従者である那多に主人の居場所を聞いたたら、朝っぱらからずっと道場で素振りしていると聞いてその通り道場に赴いたら、本当にそうだった。いつもの神主装束ではなく道場の練習着を着て、竹刀を一心に、規則正しく振り下ろしては繰り返す。戦闘に関するただけにはとてもない集中力を發揮する嵐は、背後をとらせないと有名だった。少し足音を響かせてしまったとはいえ、嵐と自分の距離は充分あった。しかし、足音ひとつで嵐は境の存在を感知した。幼少時、多少付き合いのあつた境は嵐のそういう才能に気づいていたが、今となつてもやっぱり恐ろしくも感心する。

「お久しぶりです、嵐。お元気でしたか？」

「おー。風邪なんて無縁だよ、俺には」

嵐は竹刀を片づけ、床に落ちていた手拭いで無造作に汗を拭う。

「ああ、悪いな。せっかく来てくれたのにこんなんで。ちょっと待つてろ。今、お茶でも出すから。おーい、那多あ！」

「お気遣いなく。僕の方が押しかけてしまったんですから」

「そうかあ？　いや、本当に悪いな。すぐに着替えて来るから、客殿のところで待つてくれ。そこに食い物とか運ばせる」

そう言つと嵐は急いで道場を出て行つた。どうすればいいか少しの間迷つていたが、いつの間にか道場の前に控えていた那多の案内によつて、無事客殿へ通された。

客殿に、那多がすぐにお茶と菓子を持つてくれた。その直後、嵐が戻つて來た。充分に体に滴る水を拭い切れない。髪先からぽたりぽたりと滴が落ちる。装束もきちんと着ていらない。那多はそれを確認すると、明らかに嫌そうな顔をした。

「旦那様。古くからの友人、同じ神主としての仲間とはいえ、大事なお客様です。その前で、なんて失礼な」

「いいじゃねえか、長い時間待たせるよりはさ。これでも気をつけたんだぞ」

「あなたにとつてはそれでも、従者からすれば赤点です。先日、雅

様がここへ来られた時も同じ言い訳をしていたでしょ?」

「あ、あのう。僕なら大丈夫ですので、那多さん、お気になさらず」
境はおずおずと仲介に入った。那多は本当に申し訳なく思つて
るらしく、深々と頭を下げる。その申し訳なさを作つた張本人は、
氣にもとめず茶菓子にありついていた。

「僕はこれで失礼します。何かありましたら、いつでもお呼び下さい」

お返しと言わんばかりに、那多は嵐をきつく睨んで、客殿を去る。
茶菓子のほんどうは、嵐の腹の中に消える。境は熱い茶をちびち
びと飲んでいた。

「……で? 三島と何かあつたのか? 喧嘩でもしたか?」

訪問した理由を、まだ一言も話していないのに、嵐は核心を突いた。境の持つていた茶碗が、少しだけ揺れる。

「なぜ三島に関わると分かつたのですか?」

「お前が俺に泣き言言いに来るのはいつも三島のことだからな」

「泣き言じやありません!」

境はむきになつて言い返す。

「文句言いに来るのは仕事のときだけだけど」

「その文句を言いに来たとは考えなかつたのですか?」

「あー、まあ……なんとなく?」

境はため息をつく。この男は鋭いんだか鈍いんだか。

「嵐の仰せの通り、三島のことでちよつと相談に來たんです」

ほらな、と嵐は言いつつ茶を飲み干した。

「で、どうしたよ? 喧嘩でもしたのか? だつたら連れてけ。俺
も混ざつて騒ぎたい」

「残念ながら喧嘩ではありません。喧嘩にしても殴り合はしませ
ん」

「ちえ。喧嘩でないとしたら何だ? お前と三島つて、そもそも
喧嘩なんてしそうもないよなあ。何事も円満な感じ」

「そんなんぢやないですよ。喧嘩は、しませんが……代わりにそれ

ほどの信頼関係があるわけでもないです

「へえ？」

嵐は茶菓子をつつく手を止める。昔からの友達は、そのことで悩んでいるようだった。

「まあ、何があつたか、俺に話してみな

境はぬるくなつた茶を飲み干した。

「嵐は、那多さんとどんなお話をしますか？」

「那多と？ そうだな、いつも小言ばかりだな。あいつ、小さなことでいちいちうるさいのなんの。あ、でも俺が何か言つたらちゃんと意見は言つた。あいつのおかげで頭に血が上つても最悪の事態は起こらないし、結構頼りになる」

「そうですか。それはうらやましい」

「うらやましいって、そんなの普通だろ。他の神主にも聞いてみろよ。傍若無人に見える雅だつて、十重のことを大切に思つてゐる絕對言つよ。守だつて十塚のことはかけがえのない従者だつて思つてるよ。口に出して言わないけど」

「僕は、その普通じゃないんです」

「へ。なぜに？」

境は空になつた茶碗に茶を注いだ。

「三島、何も言つてくれません。悩んでもしがあつても、一番近しい僕には一言も話しません。仕事がない田は、いつも神社を離れていました。掃除とか従者の仕事は全部終わらせでどこへ行つてしまつんです」

嵐は茶化すことをやめる。口を挟まず、最後まで聞いつと決めた。「多分、三島には三島の考え方があるんでしき。三島にとってはとても重いことで、簡単に人に話せるような類のものではないのかも知れません。だけど、それにしたつて……」

境は唾を飲み込む。

「それにしたつて、三島が遠いんです。僕にとって、三島は大切な従者です。神主として、そんな従者を守りたいし、頼りになるよう

僕なりの努力は尽くしてきたつもりです。でもだめなんです。僕は神主になれても、三島の主人にはなれないんです。信頼してないから。三島に、信頼されていないから

考え過ぎか、とも思っていたが、嵐は口をつぐんだ。三島とは何度も会つて会話するが、よく思い出してみれば、彼は自分のことは何も話さなかつた気がする。自分は従者ではないから、三島の気持ちなんて分からぬ。那多なら共感できるかも知れないが、自分は那多でもないから分からない。ただでさえ、難しいことを考えるに向いていない頭なのに。

「三島には、三島の考え方がある。でもそれは境が嫌いってことじゃないから大丈夫だよ」

嵐は、境の頭をわしわしと撫でた。昔から、こいつは些細なことで泣き言を言つたり悩んでいた。それをなだめたり慰めたりする時は、昔からこいつやり方を選んでいた。

「お前、三島が嫌いか？」

「とんでもない。嫌いだつたら、従者に選びません」

「だろ？ それに従者つてのは、神主の任命と従者に選ばれたモンの承諾がなきやなれないんだ。三島が境の従者つてのが、もうすでに答えになつてるんだと思うぞ」

境は黙つて頭を撫でられた。

御櫛神社に戻つて来た時には、もう口が沈む直前だつた。紅に染まつた太陽が、境を照らした。

「おかえり、境」

「ただいま、戻りました。三島」

三島は、嵐より少し低くはあるが、境よりはずつと長身の男だつた。のんびりと境内の掃除をしているようで、境に一聲かけてすぐに箒を動かし始めた。

「三島」

「なに?」

よく分からぬ従者は、穏やかに言葉を返した。

「僕は、三島にとつて信頼するに足りませんか」

「そうでもない。信頼してるよ」

いきなりどうしたとも聞き返さず、三島はあっさりと答えた。掃除していた手は止まり、境を見下ろす彼の目に、嘘はみじんも感じられない。境の直感でしかないが、嘘はついていないのだろう。

そんな態度をとられては、納得するしかなかつた。

「へんなこと聞いてすみません。仕事に戻つて結構です」

「うん」

境は、社務所に向かつた。

社務所で、境は仕事をするでもなく丸くうずくまつていた。
自分にとつて欲しかつた言葉は、三島から得られた。嘘ではない
ことも直感であれ分かつた。

だけど、納得いかない。納得するしかないのに、腑に落ちなかつた。

「三島、やっぱあなたはすごい
境は、そうぼやいた。

(後書き)

急に思いついてしまったお話です。信頼とはどういうものか、というのをテーマに書きました。何でも話せる人、また逆に、何も言わなくとも分かつてくれる人、どちらも信頼できる人なんじゃないかと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4595q/>

納得できない従者

2011年6月17日16時25分発行